KAN 環

若菜摘
第45号

千曲川地域の人と文化を紡ぐ

NPO法人上田図書館倶楽部（上田情報ライブラリー委託事業）

2022年1月

若菜摘（わかなつみ）

君がため春の野にいでて若菜摘む
わが衣手に雪は降りつつ

光孝天皇
（小倉百人一首十五番）

＊若菜は七草粥に入れる菜の総称で新年の季語

表紙の写真　　生島足島神社
朱色の柱や梁があざやかな本殿前の橋。祭りなどの神事で神様のみが御渡りになる橋である。参道では、夏至には東の鳥居から日が昇り、冬至には西の鳥居に日が沈む。太陽と御神体の大地を結ぶ神社として、一昨年日本遺産に認定された「レイラインがつなぐ『太陽と大地の聖地』」のひとつに位置付けられている。
今春には７年に一度の御柱祭が予定され、近くの山では御神木が定められて祭りに向けて祭事が進められている。　　写真・文　矢幡正夫

もくじ

4 セカンドライフを楽しむ
野生植物と共に　竹鼻靖之さん……伊藤文子

8 信濃を旅した文人たち
軽井沢文学散歩（その一）旧軽井沢銀座周辺……海野郁

14 寄稿
駅前の役立つ図書館を目指して……上田情報ライブラリー館長　柳原美和子

16 寄稿
上田市立上田図書館と私……井戸芳之

21 寄稿
上田自由大学100周年「私からみた上田自由大学」（第一回）
……NPO法人上田図書館倶楽部　理事長　小平千文

26 あとがき

野生植物と共に　竹鼻靖之さん

森に入り山野をめぐりて
植物たちとの一期一会を楽しむ
草花には語りかけるが如く
樹々には抱かれるが如く
（竹鼻靖之）

上田市上野在住の日本風景写真協会会員 竹鼻靖之さん（80歳）は、野生植物と歩み続けて50年以上になる。根っからの植物好きで、森や山野、湖沼のほとりを巡り、ゆったりと植物との出会いを楽しむ。季節ごとに姿を変え、自然現象によって多彩な表情を見せる植物に、優しいまなざしでレンズを向ける。

愛するのは植物だけではない。冒頭の短詩のように言葉一つひとつをていねいに綴る。写真に添えるキャプション（説明文）も、モチーフの情趣やストーリーを表す言葉を念入りに探す。それは雅号にもあらわれる。「神川萬翠」。自宅近くを流れる川「神川」とあふれる緑を表す「萬翠」を組み合わせた。

二千種以上の植物を見分けら

れる竹鼻さんを周りは放っておかない。市役所勤務時代は公園緑地課で働き、植物に関するエッセイを発行した。現在は上野が丘公民館主催の自然観察講座の講師を担う。

今回の取材は「環」の写真担当スタッフの紹介で実現した。私も植物が大好きなのでお聴きしたいことをリストアップ。竹鼻さんにとって野生植物の魅力は？　撮影のポイントは？　9月下旬にサントミューゼ市民ギャラリーで開かれた「竹鼻靖之写真展」にお邪魔した。

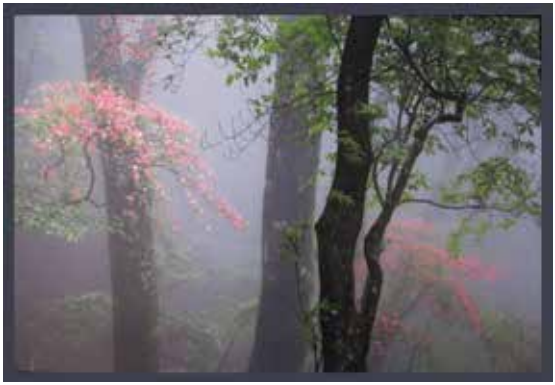
Q　いずれの写真も生き生きしていて引き込まれます。

A　傘寿を機に初めて個展を開きました。写真仲間に声をかけただけですが、大勢の方に来ていただいて嬉しいね。5日間の期間中、2回3回と足を運んでくれる人もいて。今回は30年間に撮りためた作品の中から気に入ったものを72点展示しています。

Q　一番のお気に入りはどれですか。

A　伊豆半島の猫越岳で撮影したアマギツツジです。天城峠から2時間半登って、霧の中のツツジを見つけたときは感動してね。幻想的な風景に夢中でシャッターを切りました。その中の一枚で、つけたキャプションは「花霧幻」です。

Q　写真を観ながらキャプションを読ませていただきましたが、印象的な言葉ばかりです。2本のブナの大木が並んだ写真は「寄り添って」、ピンクのカタクリは「春風の舞」、戸隠の鏡池に映る新緑は「若緑光彩」など、いずれも情趣が溢れています。写真展のテーマ「草木悠遊」にも竹鼻さんのこだわりが感じられます。



「花霧幻」（アマギツツジ）

A　キャプションはファインダーを覗いているときから考えます。その場にいて感じたことをベースに

言葉を探します。「広辞苑」や「ことのは辞典」、「歳時記」などを傍らに置いていろいろ探しますが、こういう時間も好きでね。

植物は一粒の種がこぼれ芽を出し、風雪や外敵との生存競争に打ち勝ってその場で一生を終える。大きな自然界にも小さな植物にも秘められた物語がある。その物語をどう表現できるかが写真の醍醐味でもあります。

「秋を泳ぐ」（スイレン）

Q　どうして植物の写真を撮ろうと思いましたか。

A　若い時から植物が好きで、初めは名前を覚えようと身近な植物を観察し始めました。その後、さつきの盆栽やコケ玉などいろいろやりましたが、次第に露がしたたる葉っぱや花びらの華麗さに惹かれるようになり、それらを写真におさめようと。

園芸種より野生種の方が好きで、野山に出かけては花の高さに目線を合わせてシャッターを切ります。話しかけるようにね、でも一つの花ばかり撮っていると、他の花がやきもちをやくんだよ、だから公平に目を向けてやらないと。最近は絶滅危惧種を意識し、撮影して記録に残したい気持ちもあります。

Q　どのような場所に出かけられますか。

A　県内がほとんどだけど、岐阜や埼玉、群馬、新潟などにも出かけます。信州は戸隠や志賀高原、菅平高原など自然観察スポットがたくさんあって有難いですね。それぞれの花がいつどこで咲くか概ねわかっているので、最適な時期をねらって出かけます。

写真というのは光の芸術なので、夜明け前に出かけて早朝の逆光か斜光時に撮ることが多いです。でもカメラや三脚など20キロ近い荷物をしょって山に登っても、全然シャッターを切れないこともあるんですよ。クマやイノシシに出くわしたこともあるし。

Q　自然観察講座についてお聞かせください。

A　上野が丘公民館主催なんだけど、なかなかの人気でね、30人の定員がすぐ埋まります。春夏秋の年3回、市のバスで上高地や八方大池、栂池高原などに出かけ、散策しながら高山植物を探したり植生を調べたり。でもコロナ禍で去年今年と開けないでいます。

Q　これからやりたいことは？

A　植物の水彩画を描きたいね。野生植物は採ってこれないので、その場でスケッチだけして家で写真を見ながら彩色を施します。始めたばかりだけど楽しいです。

それと来し方を振り返りつつ、エッセーも書きたい。エッセーに写真や水彩画を挿入して、いずれ冊子にできればいいなと考えています。これは人生最終章の道しるべと思っています。

♠　♠　♠　♠

神科新屋自治会活性化委員長、上野が丘公民館利用者団体会長、長野県マレットゴルフ連盟理事長など竹鼻さんは多くの顔を持つ。自治会の活性化委員会は花桃の里づくりやどんど焼き、文化財の保全などを実施し、委員長を20年以上も務める。退職後、「いろいろな役を押し付けられちゃって」と話すが、それらを淡々とこなす。ひとつ引き受けるたびに竹鼻さんの周りには人の輪が広がる。

一方で、ひとり静かに野生植物と対話しシャッターを切る。「植物と同じ空気を吸い、同じ風を受け、同じ光を感じながら過ごす野生植物との関わりは、自然の摂理に従って生きようとする自身へのこだわりでもある」。このような信念から人の心を打つ写真が生まれる。

令和3年9月27日訪問
伊藤文子

多くの来場者で賑わう「竹鼻靖之写真展」

①水車の道

軽井沢 文学散歩（その一）
旧軽井沢銀座周辺

「信濃を旅した文人たち」では、これまで軽井沢を愛した文人たちを何人か紹介してきました。今号から3回に分けてゆかりの場所を訪れたいと思います。

初回に歩くのは旧軽井沢銀座周辺です。中山道の宿場町だった軽井沢宿は、明治に入って旧軽井沢銀座として生まれ変わりました。

大正12年夏、堀辰雄は初めて軽井沢を訪れます。メインストリートに西洋婦人が行きかう異国情緒あふれた軽井沢は、19歳の堀をすっかり夢中にさせました。

現在の旧軽銀座は、皆様もご存じのように観光客で賑わっています。まずは、その通りに並行した「水車の道①」にある「聖パウロカトリック教会②」からスタートしましょう。堀の代表作のひとつ『風立ちぬ』や『木の十字架』に登場する小さな美しい教会です。堂内に一歩足を踏み入れると、すりガラスから光が差し込んで、素朴な木の温もりの中に神秘的な雰囲気が漂います。

万平ホテル
8
室生犀星
詩碑
6
矢ケ崎川
芭蕉句碑
4
室生犀星
記念館
7
ショー記念
礼拝堂
5
3
つるや旅館
軽井沢会
テニスコート
軽井沢
写真館
軽井沢
観光会館
水車の道
1
旧軽井沢銀座
軽井沢
教会
2
聖パウロ
カトリック教会
町営駐車場
精進場川
有島武郎
終焉地碑
9

②聖パウロカトリック教会

信州軽井沢にある、聖パウロ・カトリック教会。いまから五年前（一九三五年）に、チェッコスロヴァキアの建築家アントニン・レイモンド氏が設計して建立（こんりゅう）したもの。簡素な木造の、何処か端西（スイス）の寒村にでもありそうな、朴訥な美しさに富んだ、何ともいえず好い感じのする建物である。（堀辰雄著『木の十字架』より）

③つるや旅館

堀は「聖パウロ教会で結婚すると多くの人達から祝福される」という言葉を残しています。今も若いカップルに人気が高く、挙式時にはパイプオルガンが素敵な音色を奏でるそうです。

④芭蕉句碑

その教会の前を通る「水車の道」は緑溢れる静かな小径です。「つるや旅館③」の裏に水車小屋があったことからそう呼ばれ、堀の『美しい村』に繰り返し登場します。そう、堀はつるや旅館に滞在しながらこの小説を執筆、水車の道は散歩コースのひとつでした。

江戸時代に栄えた旅籠鶴屋は、明治になってつるや旅館に

転じ、芥川龍之介や室生犀星ら多くの文人たちが滞在するようになりました。

つるや旅館の近くには「芭蕉句碑④」があり、「馬をさへなかむる雪のあした哉」の句が刻まれています。前書に「旅人を見る」とあり、「雪のふりしきる朝方、往来を眺めていると多くの旅人がさまざまな風をして通って行く。人ばかりでなく、駄馬までがふだんとちがって面白い恰好で通っていくよ」との意だそうで、芭蕉らしいウィットに富んだ句だなあと思います。

その句碑と道を挟んだ先にあるのが「軽井沢ショー記念礼拝堂⑤」で、「避暑地軽井沢発祥の地」の標識が立っています。明治19年、宣教師アレキサンダー・クロフト・ショーは旅の途中に軽井沢に立ち寄り、祖国スコットランドを思わせる自然にすっかり魅了されます。2年後には軽井沢初となる別荘を建て、宣教師仲間や外国人たちに軽井沢を紹介、寂れた宿場町が避暑地として変貌するきっかけを作りました。礼拝堂の後ろにはショーハウス記念館があり、見学が出来ます。

次いで、近くを流れる矢ケ崎川に架かる二手橋（にてばし）を渡りましょう。その先は碓氷峠の見晴らし台に向かいますが、その道を登らずに川沿いを左折します。川の畔には「室生犀星文学碑⑥」があり、詩集『鶴』の中の一編「切なき思いぞ知る」が刻まれています。脇に

⑤軽井沢ショー記念礼拝堂

⑥矢ケ崎川畔の犀星文学碑

は満州旅行の折に求めた石の俑人（ようじん）一対が置かれ、人目にふれないような場所にという犀星の思惑通り、矢ヶ崎川のせせらぎと木漏れ日の中にひっそりと佇んでいます。

犀星にとって軽井沢はもうひとつの愛すべきふるさとでした。つるや旅館や貸別荘に毎夏滞在、執筆活動を続けていましたが、昭和6年には大塚山（だいづかやま）に別荘を建ててしまいます。

その犀星旧居に向けて、旧軽銀座を下っていきましょう。右側に軽井沢写真館がありますが、その斜め前の道を左折、さらに突き当りを左折してすぐの小径に入ります。純和風な旧居は、現在「室生犀星記念館⑦」として緑と静寂に包まれて建っています。

犀星は亡くなる前年の昭和36年まで毎夏ここに滞在、『杏っ子』な

⑦犀星旧居。敷きつめられた苔が見事！

⑧万平ホテル

⑨有島武郎終焉の地

ど軽井沢を舞台にした作品を数多く残しました。若き日の堀や立原道造など、多くの文人たちが足繁く訪れたそうです。昭和19年から24年まではここで疎開生活を送り、軽井沢の厳しい冬や食料の乏しさも経験しています。（記念館は一般公開されていますが、冬季は休館します）

記念館からは旧軽銀座とは逆方向に「万平ホテル⑧」へと向かいます。古くから外国人や文人たちに愛されてきたホテルです。つるや旅館に滞在していた当時、犀星は芥川と日課のようにホテルに通い、ティタイムを楽しんでいたそうです。文学散歩に疲れたら、カフェテラスでミルクティでもいかがでしょう。

今回、最後に訪れるのは「有島武郎終焉地碑⑨」です。旧軽銀座ロータリーから三笠通りを進み、旧三笠ホテルの手前、唐掘通りを右折します。そこから「有島武郎終焉地碑」の案内板に沿って坂道を上ると、木立に囲まれた鎮魂の場が広がります。有島家の別荘「浄月庵」があった所です。『生れ出づる悩み』『或る女』など、今なお愛読され続けている有島ですが、大正12年6月9日、雑誌記者の波多野秋子とここで衝撃的な死を遂げました。

この場所には終焉地碑の他に「ティルダへの友情の碑」が建っています。有島はスイス旅行の際に出会ったティルダ・ヘックと死の前年まで16年に渡って文通を続けました。二度と会うことのなかったふたりですが、ティルダは有島の死から14年後に来日、この地を訪れて有島を追悼しています。友情の碑には「私達の友情は何と純粋で、貴く、深いものでしょう！　この世にこのような友情がまたとあるでしょうか！」とティルダ宛ての書簡文が刻まれていて、時空を超えた美しい友情に心が癒される気がいたします。

初回の文学散歩はいかがでしたでしょうか。軽井沢の素晴らしい自然の中、ゆかりの場所には文人たちの想いが今も確かに息づいています。次回は中軽井沢と塩沢エリアを歩きたいと思います。

海野　郁

Webサイト
軽井沢観光協会公式ホームページ・軽井沢の文化
https://karuizawa-kankokyokai.jp/knowledge/289/

寄稿

駅前の 役立つ図書館を目指して

上田情報ライブラリー館長
柳原 美和子

上田情報ライブラリーは平成16年4月に開館しました。上田駅前及び中心市街地の活性化のため、上田地域の表玄関であるという立地条件を生かし、既存の上田市立図書館にはない特色のある図書館を目指しました。

その特徴としては、「暮らしとビジネス支援」、「千曲川地域文化の創造と発信」、「市民協働の図書館づくり」の三つのコンセプトを掲げていることです。

一つめの暮らしとビジネス支援については、関連資料の収集は勿論ですが、電子媒体の設置と貸出の充実が大きな特長です。多種類のデータベース、インターネット、メール、文書作成、印刷の各機能のあるパソコンの設置、また、個人のパソコン利用専用席では、インターネット接続ができ、ランケーブルなどの貸出も行っています。DVDの所蔵も多く、館内での視聴も可能となっています。

二つめの千曲川地域文化の創造と発信では、広範囲の千曲川流域の郷土資料、地域資料を積極的に収集しています。また、開館から隔年で実施している講座「地域の文化人シリーズ」の関連資料を常設展示し、地域に根付いた運営をしています。

三つめの市民協働の図書館づくりでは、本誌「環」の発行者でもありますNPO法人上田図書館倶楽部が開館と前後して発足し、当館との協働で携わっていただいています。市の職員は専門知識がない場合や定期異動で継続的に携われないこと、図書館独自の理由として非常勤職員の割合が高いことなどから、知識や経験のある方による協働は欠かせないものとなっています。

当館の他の特徴として、カフェ、ホール、有料のセミナールームの併設があげられます。最近では、複合施設の一部として図書館を設置している自治体が多く、珍しくなくなりましたが、開館当時は先進的でした。先に触れた

図書館倶楽部が、カフェの運営や朗読会やコンサートの会場としてホールを利用しています。セミナールームは社会教育関係の団体に有料で貸し出しています。

この他、当館では住民票や税関係の証明書の交付も行っており、土日祝日など市役所の閉庁時間でのご利用に役立つ施設としての役割を担っています。

開館から17年あまり、図書館を取り巻く状況は変わってきました。スマートフォンやタブレットの普及により、気軽にネットにつながる環境が増えたことに加え、新型コロナウイルス感染症の流行が、従来の図書館サービスの在り方を考え直すきっかけともなりました。次号では現在の図書館の課題について触れたいと思います。

パソコン席

データベース席

印刷用パソコン（後方はDVD）

寄稿　第三回

上田市立上田図書館と私

井戸芳之

上田市立上田図書館外観

この寄稿も三回目になりました。第一回は上田市立美術館、第二回は上田市立博物館のことを書きました。今回は上田市立上田図書館のことを書きます。

上田市立上田図書館は、昭和四十五年十一月に現在の場所に開館しました。その前身の上田図書館は大正十二年に、現在の旧石井鶴三美術館の場所に開館していますので、実に九十八年、現在の場所に移ってからでも五十一年の歴史があります。

近年では、平成七年に近隣の市町村との相互貸し借りのためのネットワークシステム「エコール」の運用を開始、平成十一年に上田創造館に分室が開館、平成十六年には駅前ビル「パレオ」に当時の上田市で二つ目の市立図書館「上田情報ライブラリー」が開館し、図書館の役割と利便性が拡大しました。

上田図書館の蔵書・貸出関係の統計は、令和二年度で、蔵書冊数が約三十五万四千冊、年間貸出冊数が約三十一万二千冊です。利用登録者数は全体で約二万八千人おり、登録者一人当たりでは、市内の他の図書館での利用を含めて、一年間に約二十冊を貸し出しています。

（貸出数は、新型コロナウイルス感染症の対策のための臨時休館などの影響で、例年より一割余り少なくなっています）

図書館の事業と言えば「本の貸出」の印象が強いですが、それだけではなくもっと広範囲にわたります。上田図書館では、主に「資料の提供と情報サービス」「資料の収集・整理・保存等」「市民協働による図書館づくり」などの事業を行っています。

「本の貸出」は「資料の提供と情報サービス」の事業の業務の一部です。この事業には例えば他にも、利用者からの問い合わせに応える「レファレンスサービス」があります。利用者からの調査相談の依頼に答える業務で、例年は約三千六百件もの依頼に対応しています。メールや郵便での問い合わせもあり、また「過去に上田にあった○○について知りたい」といった、調査に日数を要する依頼も、かなりの数になるそうです。

「資料の収集・整理・保存等」の事業では、地域資料、行政資料等の収集と保存整備を行っています。

例えば、江戸庶民文化の研究と古書の収集に力を入れた飯島保作が遺した、一万点近い図書のコレクション「花月文庫」をはじめ、「藤

閉架書庫での貴重資料の保管

廬文庫」「花春文庫」など、数多くの貴重資料を収蔵し、目録を作り、一部はデジタル化・公開しています。

また二階の「参考調査室」には郷土資料等を約一万七千冊、新聞十七種類を収蔵しています。信濃毎日新聞は昭和二年から保存され、ローカル紙「信州民報」は昭和二十年十二月の創刊号から、明治十八年発刊の「上田郷友会月報」も第一号から、マイクロフィルム化、デジタル化されて閲覧することができます。これらは、こうしたまとまった形ではおそらく上田図書館でしか見られない貴重な資料です。

「市民協働による図書館づくり」の事業では、古文書学習会、音訳奉仕活動の会、ストーリーテリングと読み聞かせの会、修理ボ

ランティア等との連携を進めています。具体的には、貴重資料紹介展・講演会、録音図書の作成と利用の拡大、おはなし会・絵本講座の開催、本の修理などを行っています。

さて、ここからは上田図書館と私の関りについて書きます。

私は読書が好きなので、図書館をとてもよく利用しています。記録によるとこの一年間に三十八回も足を運んでいました。月平均で三回あまり、二週間に一回を超えるペースです。

行けば必ず本を借ります。年間で何冊借りたのかを、推計してみました。私が読んだ本の感想を書いているブログ「本読みな暮らし」には、昨年一年間に百一作品の記事があり、そのうちの五十五冊が、図書館から借りた本でした。記事を書かない本が二割ぐらいあるので、七十冊ぐらい借りているようです。統計では平均で一人当たり約二十冊ですから、その三倍以上。改めて図書館にはたいへんお世話になっていることを実感します。

「源氏百人一首 完」天保12年発行
（貴重資料紹介展で撮影）

二年に一回、楽しみにしていることもあります。上田図書館と古文書学習会「やまなみ」の共催による「貴重資料紹介展」です。普段は閉架書庫で保管されている貴重資料が展示され、手に取って見ることができます。「やまなみ」の皆さんの研究成果である解説図録も購入できます。

今年のテーマは「むかしも今も百人一首」。江戸時代以降、「小倉百人一首」以外に様々な「百人一首」が発行されたそうで、会場では「源氏百人一首」とか「英雄百人一首」とか「烈女百人一首」とか、二百点以上を展示していました。見ているだけでワクワクしました。

過去には「江戸のコミック 草双紙」「浄瑠璃 江戸のオペレッタ」などをテーマに展示され、どれもとても面白かったです。そして面白いだけでなく、この催しは図書館の貴重資料を読み解いて市民に提

供する、素晴らしい活動だと思います。

私はいつかこれらの貴重資料のデジタル化と公開をしたいと思っています。

ここからは、上田図書館とのお仕事の紹介をします。貴重資料のデジタル化の事業が2つあります。

東山道信濃国略図

https://museum.umic.jp/library/

貴重資料コレクション「花月文庫」の中の絵図で、ヨコ約百三十六センチ、タテ約二百二十二センチあります。制作年は宝暦二年（千七百五十二年）。江戸時代の信濃国（今の長野県）を描いた絵図で、街道や村の名前の他に観光名所なども記されています。

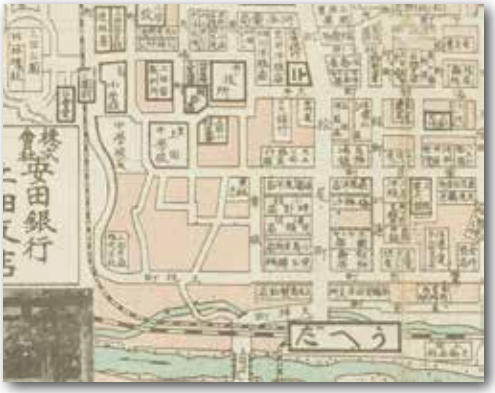
この絵図を撮影してデジタル画像化し、ホームページで拡大して閲覧できるようにしました。平成十一年に実施した事業ですから、二十年以上前です。この後に続く絵図のデジタル化の最初の事業となりました。

上田古地図・絵図デジタルアーカイブ

https://museum.umic.jp/ezukochizu/

上田市立上田図書館が収蔵する、江戸時代から明治・大正・昭和にかけて制作された上田市に関する古地図・絵図の二十点を紹介するホームページです。博物館が収蔵する城下町絵図七点も合わせて紹介しています。

「東山道信濃国略図」と同様に拡大して閲覧できるほか、別の年代の地図を見比べることで、町の移り変わりを調べることができます。また裏面に載っていた広告なども公開していて、当時の商店などの様子も分かります。



「大日本職業別明細図(部分)」昭和3年発行
（インターネットで公開した古地図）

最後に、今回のテーマの「図書館」に関連して本を一冊ご紹介したいと思います。（実は私は本を読むのと同じぐらい、誰かに本を薦めるのが好きです）

『お探し物は図書室まで』（青山美智子著　ポプラ社）

小学校に併設された地域住民のためのコミュニティハウスの中の図書室が舞台です。地域住民のための図書室とはいえ、蔵書は充実していて、専門の司書を置いたレファレンスコーナーまであります。

そのリファレンスコーナーの司書の小町さゆりさんがすごい。お客さんの話を聞いた小町さんは、猛スピードでパソコンのキーボードを叩いて選書してくれる。その中には一見すると無関係な本も交じっているのだけれど、その本こそが…という話。

深刻な悩みまで解決してくれないけれど、読み終わると気持ちが少し晴れるような物語です。

☆筆者ご挨拶

こんにちは。私は井戸芳之と申します。平成八年の暮れに東京都から上田市に引っ越してきました。それ以来二十四年あまり上田市マルチメディア情報センターに勤めています。趣味は美術鑑賞と読書です。

私はここに、上田市の公共施設のことを書いています。その理由は、私が常々「公共施設が私の暮らしを豊かにしてくれている」と実感していて、それを知っていただきたいからです。上田市に来る前に住んでいたのはどこも大都市で、その頃には公共施設にこんな想いを感じることはありませんでした。

上田市上本郷のどんど焼き

四角錐状に吊り上げられたダルマの中心に、門松やしめ飾りなどを積み上げる。そこに小学生が火矢で点火。たちまち炎が立ち上り、拍手がわき起こる。新年初めの地域の伝統行事である。

上田自由大学100周年「私からみた上田自由大学」（第一回）

ＮＰＯ法人上田図書館倶楽部
理事長　小平千文

はじめに

２０２１年11月１日、この日から溯ること１００年前の１９２１年11月１日、信濃（上田）自由大学は開講しました（１９２４年「上田自由大学」と改称。以下、上田自由大学と称す）。上田自由大学が誕生したこの時は、現在世界を席巻している新型コロナウィルス（ＣＯＶＩＤ－１９）と向き合っていると同じように、Ｈ１Ｎ１亜型インフルエンザによる「スペイン風邪」第３波から収束へと至る局面に向き合っていた時でした。

いっぽう、「蚕都上田」を築いていた上田小県地域は、前年から始まった第一次世界大戦後の戦後恐慌の影響を受け、基幹産業である蚕糸業からの転換を迫る主張も出始めるほど厳しい状況に直面していました。こうした状況を包みながら大正デモクラシーというこれまでの社会を「改造」しようという新しい思潮や運動に満ちあふれていた時でもありました。

この時期、上田小県の青年たちは、とりわけ政治や教育文化の面で、創造的な改造運動を県内外へと発信していきました。それは、経済面で直面している困難を政治や教育文化の面から打破しようとする動きでもありました。時系列で取り上げてみると、「おらが村の新聞」として村からの援助を受けて青年会・団の編集により『時報』を発行したこと、臨画に代わる今日の美術教育の基礎となっている自由画を主張して始まった児童自由画運動、農民の副産業として推奨された農民美術運動、吉野作造らによって創設された黎明会にならって作られた信濃黎明会の発会、米騒動後被差別部落解消を願って設立された融和団体である信濃同仁会の結成、そして「自学自習」を求めた上田自由大学の開講でした。いずれも一世紀前後の動きですが、現在から見て決して遜色がない、むしろその試みの意図したことから学び活かしていくことができる創造的な活動でし

た。それだけにその一つ一つについてその活動内容に触れていきたいところですが、本稿では上田自由大学だけを取り上げて「私から見た上田自由大学」として、4回ほどにわたりどのような講座が行われ、どのような人たちが学んだのか、自由大学のひろがりの様子やその存否状況、さらに学んだ人たちのその後の生き方、そして現在上田自由大学はどのように私たちの生活の中に入り込んでいるのかについて書き綴ってみたいと思います。

上田自由大学誕生までのあゆみ

新しい事業を興すには、それなりの準備が必要であることはいうまでもありません。開講から一世紀が経つ上田自由大学も例外ではありませんでした。まず、上田自由大学誕生に至るまでの助走期間ともいえる動きからみていくことにしましょう。その動きは、上田自由大学誕生に直接結びつかなくてもこの大学を生み出していくことに間接的な影響を与えていくことになったのではないかと思われる哲学講習会がありました。それは、1916（大正5）年から17年にかけて行われました。主導したのは、哲学講習会を発案したり資金援助をした小県郡神川村（現上田市）国分生まれの金井正（1886－1955）でした。それから3年後、自由大学誕生の出発点となる哲学講習会が1920年から21年にかけて同村の山越脩蔵（1894－1990）によって開催されました。蚕種製造業家に生まれた金井と山越は8歳違いの上田中学校（現上田高等学校）卒業の同窓生。殊に山越は宗教や哲学、社会科学書を耽読する金井の考え方や生き方に強い影響を受けていた間柄でした。この2人が中心となって実施した哲学講習会は、次のようなものでした。

左：山越脩蔵、中央：金井正、右：西田幾多郎
1916.8.4　上田海野町　上村旅館
小崎軍司著『夜明けの星』より

金井が主導した哲学講習会

2回開かれました。1回目は、1916年8月5日から7日ま

での3日間にわたり上田中学校講堂にもたれました。講師は京都帝国大学（現京都大学）哲学科教授西田幾多郎（石川県1870－1945）。聴講者400余人。演題は「現代哲学に於ける科学的真理の概念」（注1）。2回目は、翌年の17年に東北帝国大学（現東北大学）講師田辺元（東京都1885－1962）による哲学講習会でした。この2回の講習会は、信濃教育会小県支部による夏期講習会として行われたもので、直接上田自由大学誕生へとつながるものではありませんでした。しかし、こうした哲学講習会が多くの聴講者を得て開かれたことは、類似した哲学講習会を開催することができる環境作りになったといえるでしょう。これから3年後に開催された山越脩蔵による土田杏村哲学講習会は、間違いなく自由大学誕生という新たな芽を生む基点となった講習会になりました。

35歳の杏村（大正15年11月）
上田敏郎著『土田杏村と自由大学運動』より

山越による土田杏村哲学講習会

講師は、哲学者土田杏村（本名茂、新潟県佐渡市1891－1934）でした。土田の評論や『象徴の哲学』（1919年）などを読み、学識の広さと深さに敬服していた山越は、この土田の意見は「吾々を指導するに足る」との思いから上田での講演依頼をして実現させた講習会でした。2回実施されました。

1回目は、1920年9月23日、3時間あまり信濃国分寺客殿を会場に文化主義論について話されました。聴講料3円。24日から4日間にわたり4時間、間に3回の休憩をとる方法で「新カント派の哲学」についての話が聴講者32人（青年5人、女性1人、他は小学校教員）を前に語られました。「親切な講義で理解し易く、この様な講義だと、数度くり返せば、哲学書も理解できるようになる」との聴講者の感想から、山越は「連続して此種の講習を計画の可能を感じた」（注2）と記しています。「自由大学設立の趣旨」に書き込まれている「統一連続的の研究」の原型になるものと受け止めれば、このとき上田自由大学設立の胎動の芽が出芽したことになります。それを確かなものとした

のが翌１９２１年２月20日から24日まで上田高等女学校（現上田染谷丘高等学校）を会場に行われた第２回目の土田杏村哲学講習会でした。60余人の聴講者を前に話されたテーマは「現代 墺（オーストリア） 国学派の哲学」についてでした。山越は、聴講者の賛同を得て今後も継続するためとして講習会を「小県哲学会」と命名しました。土田は「地方で出来た、おそらくは最初の哲学会でせう」（１９２１・６・１）と山越宛の手紙に書いています。講演後、土田が宿にしていた上村旅館を訪ねた山越と金井、そして猪坂直一（上田町１８９７－１９８６）に、土田から「これからは考える人間、批判力のある人間を作り上げていかないとこの世の中はよくならない。ぼくは系統的な学問をする民衆教育機関を作りたい」（注３）との話を聞かされました。山越は、「土田のいう系統的民衆教育機関を自分たちの力でつくりたい」思いから、この会を基礎とした一定数の聴講者を得ることや協力できる講師、教室として借用できる部屋ないし建物などの条件が整えば文化科学全般にわたる講座が開けるのではないかとの研究を土田にお願いしました。この願いに対する土田の返信はがきと別封により、自由大学構想は実現の方向で動き出すことになりました。６月20日付返信はがきには「御計画とに角大賛成」、26日付では「二講座でも三講座でもいいといふのは賛成です。それぢゃあ直ぐに成立します。……直ぐに自由大学の名をつけておく方がよい……僕が一講座持つ、高倉輝君が一講座持つ」、と記されていました。この時、はじめて「自由大学」の名前と高倉輝という講師の顔が登場しました。また、別封には自由大学の趣意書の原稿が添えられていました。さらに30日書簡の別封では、「日本最初の試みだから趣意書など馬鹿にされないものにしたい」としてさらに手が加えられた「趣意書風のもの」が添えられていました。確定した信濃自由大学趣意書は、次号で紹介します。以上のような経過をたどりながら上田自由大学は産声をあげることになりますが、ここに至るまで金井や山越たちが主導した試みを具体化させることに檄を飛ばすようにして影響を与えた人が土田の他にもう一人いました。最後に、その人に触れてこの項を閉じたいと思います。

２人に影響を与えた人　その人

は、児童自由画や農民美術を提唱した画家山本鼎（愛知県岡崎１８８２－１９４６）です。１９１６年、第１回西田幾多郎哲学講習会が開かれた年の12月、フランスに留学していた山本がロシア経由で父山本一郎が経営している山本医院（大屋）に帰国しました。翌17年１月、帰国歓迎会が大屋館にもたれました。金井に誘われて出席した山越は初めて山本と出会うことになりました。２月４日、山本に招かれた金井と山越は上田町喜久興亭（注４）の席上で山本から唐突に「君たちは日本のオブローモフではないかね」と問われました。この出会いと話が、児童自由画や農民美術、上田自由大学という新しい文化を築き上げていくことに「応分の努力をする」という決意をさせました。このときの様子を山越は、次のようにメモしています（注５）。（　）内は執筆者の補充

吾々はそれを知らなかった。（ロシア）のゴンチャロフの小説に出て来る主人公の名で、地主の若主人で大学教育を受け地位もあり金もあり誠に恵まれた境遇であったが、思ひついた仕事をするが、どれもなしとげ得ないで一生を終ると言ふ人物のことである。と言うのであった。吾々は「オブローモフ」の説明によって、必ずしも事柄の如何によっては、その事柄の遂行に力を添へることに応分の努力をすると言明した。

山本　鼎
中野光他編『大正自由大学の光芒』より

こうして児童自由画も農民美術も、そして上田自由大学も「応分の努力」によって誕生をみることになったのです。

（つづく）

（注1）講演の概要は、『信濃教育』359号　大正5.9.1に掲載されている。『西田幾多郎全集』２　岩波書店　1950年には、「自覚における直感と反省」と題して収録されている。
（注2）大槻宏樹編『山越脩蔵選集―共生・経世・文化の世界―』前野書店　2002年
（注3）小崎軍司著『夜あけの星　自由大学/自由画/農民美術を築いた人たち』造形社　1975年
（注4）大谷文子著『セピア色のアルバム』週刊上田新聞社　2009年
（注5）山越脩蔵「上田杏村の手紙と上田自由大学」（『信州白樺』NO,29 1978）および大槻前掲　山越脩蔵「上田杏村の手紙と上田自由大学」（『信州白樺』NO,29 1978）および大槻前掲書

あとがき

芥川龍之介の『羅生門』、夏目漱石の『夢十夜』、志賀直哉の『城の崎にて』、原田マハの『砂に埋もれたル・コルビュジェ』、村上春樹の『鏡』。

何と魅力的なラインナップなのだろう！　文部科学省の教科書検定に合格した、第一学習社の令和４年度「現代の国語」（高校一年）に掲載された５作品だ。ところが、この教科書が物議をかもしている。

一年生で学ぶ「国語総合」では、これまで小説を含めた現代文と古典の分野を教えてきたが、新年度からは「現代の国語」と「言語文化」に分けられることになった。「現代の国語」では評論文など「現代の社会生活に必要とされる論理的な文章及び実用的な文章」を掲載、「言語文化」では「古典及び近代以降の文章」として小説や随筆、漢文や古文などを扱うこととした。ただ、受験を考慮すると漢文や古文は省略しにくく、いきおい小説は削らざるを得なくなる。また、文科省の学習指導要領の説明会では「『現代の国語』はノンフィクションの科目であり、小説が入る余地はない」と説明されていた。

ところが、第一学習社は不合格覚悟でチャレンジした。教育現場から「『現代の国語』の中で小説を扱いたい」との声が数多く聞かれたためである。結果、対象外のはずの小説を載せた教科書は合格、都立高校における採択部数は他の教科書を抑えて最多となった。

検定に合格した中で小説を掲載したのは第一学習社のみだったので、ライバル社からは一斉に抗議の声が上がった。教科用図書検定調査審議会は「今回の事態を重く受け止め、今後はより一層厳正な審査を行う」とし、文科省は「今後は文学作品が安易に載ったり、少し工夫すれば載ったりする科目でないことを理解して頂く」とした。ということは、今後、文学作品が掲載される見込みは少なくなるということだろうか。

私たちは教科書の中で多くの文学作品に出合ってきた。多感な時期に読んだ文学は、音楽や美術などと共に豊かな感性を育んでくれたと信じている。今回、第一学習社が掲載した作品も、多様な考え方や生き方を感じとる道標となり、子どもたちの心の奥底に刻まれることだろう。

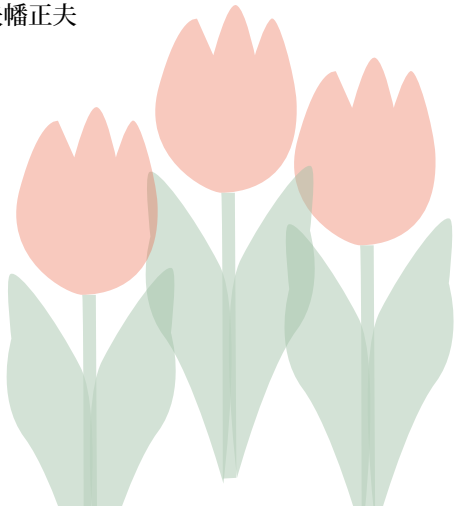
「教科書から文学が消える」などということがないようにと願うばかりだ。

（はな）

KAN
環　千曲川地域の人と文化を紡ぐ
第 45 号　若菜摘　2022 年 1 月発行
NPO 法人上田図書館倶楽部　https://ueda.zuku.jp/
電話 /FAX　0268-25-3115　info@zuku.jp
（上田情報ライブラリー委託事業）

表紙及び文中の写真・絵は無断使用を禁じます。

環スタッフ：
伊藤文子　海野 郁　西入幸代
宮下明彦　望月聡子　矢幡正夫



ＮＰＯ法人上田図書館倶楽部は、図書館との協働による学習活動や情報サービス活動、文化活動などを行っています。また図書館関連業務を上田市から受託して、市民参加による幅広い図書館サービスを行い、地域文化の発展に寄与することを目的としています。電子ジャーナル「環」も受託事業の一つとして上田図書館倶楽部が発行しており、千曲川地域の文化を通して人と人、人と地域をリングのように結び、文化とコミュニケーションの環を広げていくことを理念に掲げています。